

第 1 章

現代の乳幼児を取り巻く人間関係と 保育の課題

本章のねらい

私たちは社会の一員として日々生活を営んでいます。生活スタイルは都市化や急速な情報化に伴い、ここ数十年でこれまでに例をみないほど大きく変化をしています。生活の変化は私たちのみならず子どもの育ちにも大きな影響を与えているといえるでしょう。社会の中で人と関わって生活していくためには、幼少期から様々な人と関わりながら「どのように人と関わっていったらよいか」ということについて経験を通して学んでいく必要があります。現代の便利な生活は直接的な人との関わりを減少させる傾向にあるといえます。

本章では乳幼児を取り巻く現代の社会環境および人間関係の特徴について学びを深めます。自らの生活を振り返りながら、子どもたちの人間関係の育ちを促すために、保育現場においてどのようなことが大切なのか考えてみましょう。

① 人間関係とは何かということを振り返ってみましょう。

人は他者との関わりなくしては生活していくことはできません。自らの生活を振り返りながら人間関係について考えてみましょう。

② 現代の社会環境と人間関係の特徴について理解しましょう。

現代の人口構成、家族構成、日常生活の様子などから、昔と今で人との関わりがどのように変化したか、またどのような特徴があるのかということについて学びましょう。

③ 現代の人間関係の特徴から保育の現場において何が課題となっているのか考えましょう。

現代の人間関係の特徴から、乳幼児期を過ごす保育施設はどのような役割を担うのか理解しましょう。また保育施設における課題について考えてみましょう。

第1節 人間関係とは

(1) 人との関係の中での「自分」

皆さんの1日の生活を振り返りながら人間関係について考えてみましょう。
例えばこんな1日が考えられるでしょう。

朝に起床したらお母さんが作ってくれた朝ごはんが準備されていました。高校生の弟と一緒に昨日のテレビ番組のことを話しながら朝食を食べました。朝食を食べ終わると、満員電車で45分揺られながら学校に登校します。午前中に2時間の授業を受け、クラスメートと学生食堂で昼食を食べ午後の授業に出席しました。夕方から2時間バスケットボールサークルの練習に参加し、その後、飲食店でのアルバイトに向かいました。アルバイト後に帰宅すると、お父さんが遅めの晩御飯を食べていました。「ただいま」とあいさつをして、自分の部屋に向かいました。

例を自分のことと捉え、「自分」という存在について考えてみましょう。例えば、お母さんやお父さんにとってあなたは息子あるいは娘です。弟にとっては兄あるいは姉となるでしょう。満員電車の中では乗客の一人ですし、学校では学生として授業を受け、クラスメートやサークルのメンバーにとってあなたは友人となります。アルバイト先の飲食店では、従業員として後輩であると同時に、お客さんにとっては店員となります。このように「自分」とは様々な人との関係の重なりとして存在しているということがわかります。

続いて、人との関係に関連する行為について例をもとに見ていきましょう。朝、あまり食欲がないからといって、朝食のお皿を突然ひっくり返すことはないでしょう。また、満員電車の中、車両に響き渡るような大声で歌うこともなければ、学校での講義中に一人で教室内を走り回ることはないと思います。このように私たちは人との関係の中で、自分はどうのようにふるまうべきかということをも身に付け、自然に行為として実行しています。

例でみてきたように社会の成員それぞれが、自らの置かれた立場、状況を理解し行動するからこそ社会の秩序が保たれているのです。それではこうした力は生まれながらにして誰にでも備わっているのでしょうか。答えは否です。国や文化によって人との関わり方が少しずつ異なるように、子どもたちは成長過程において、生活する環境の中で人との多様な関わりを通して、人との関わり方を次第に身につけていくのです。

心身共に大きな成長を遂げる乳幼児期は、自己を確立し、他者との関わる力を身につけるために重要な時期となります。乳幼児期の保育に携わる私たちは、この時期の重要性を理解し、子どもたちと関わっていくことがとても大切になってくるでしょう。

(2) 保育者としての人間関係

① 保育者同士の人間関係

このテキストでは主に保育現場における子どもの人間関係の育ちとそこでの保育者の援助および保育現場における人間関係について取り上げていきます。前述したとおり日常の生活が様々な人との関係の中にあるのと同様に、保育の現場も様々な人間関係の中にあります。ここでは同じ場で保育を営む者としての保育者の人間関係について例をあげ、人間関係が持つ特徴についてみなさんと考えてみたいと思います。

【エピソード1-1】 気にはなっていたのだけれど…

A園では5年目の保育者Bと1年目の新人保育者Cの2名で3歳児クラスを担当しています。保育室には保育者が選んだ玩具が棚に置いてあり、子どもたちは棚に置いてある玩具の中から好きな玩具を自分で選び、遊び始めます。

ある日アツシは、自動車の玩具を棚から取り出し、道路の描かれているマットの上にびっしりと並べます。たくさんの自動車の玩具が並べてあるため、せっかく道路が描かれているにも関わらず、道路を走らせて遊ぶこ

とができません。すべての自動車の玩具（全部で50台ほど）を並べ終わると、飽きてしまったのかたくさんの自動車をそのままにして他の遊びに移っていきます。



その日の保育後の研修会において、研修講師が車の玩具の数が多すぎることを指摘し

ました。クラスの人数が25名であるのに対し、車の玩具は倍以上の数があること、同じ種類の車（例えば救急車）の数が10台もあること。そして車を並べて満足してしまうから、車の玩具を使った遊びに発展性がないのではないかと感想を伝えました。

すると子どもの遊びの様子を見ていた保育者Cが「少し前から車の玩具が多すぎるのが気になっていたのだけれど・・・」と話します。

保育の現場では、1クラスを複数の保育者で担当することが多くあります。エピソード1-1は複数の保育者でクラス担任を持ったときに生じやすい出来事であるといえます。複数でクラスの担任をすることの利点は、1人担任の時よりもより細やかに子どもに対応できること、複数の目で状況を捉えることができることなどがあげられるでしょう。そして新人保育者にとっては、先輩保育者の保育実践を見ながら実践について学んでいくことができます。しかし、この先輩、後輩という人間関係は時として複数担任の良さを軽減させてしまいます。保育者Cは少し前から、自動車の玩具が多すぎるのが気になっていましたが、保育者Bが準備した環境構成であるので言い出せずにいたのです。経験年数の差はありますが、保育者Bも保育者Cも同じクラスの担任です。先輩、後輩といった枠を超え、保育者としてクラスの子どもたちの育ちを第一に考えながら協力して保育に取り組んでいく姿勢が大切になってくるでしょう。

② 保育者と子どもの人間関係

エピソード 1-2 「大工さんになる！」（5歳児）



K 幼稚園の園庭にある遊具は、すべて手作りです。園庭の中心にある大きなさくらの木を中心として作られているツリーハウスは子どもたちに大人気。子どもたちが元気に遊ぶ中、5歳児のクラス担任ヨシノブ先生は、長いはしごを桜の木に立てかけて、はがれ

かけたツリーハウスの塗料を塗り直しています。

ある日、将来何になりたいかをみんなで話していたとき、5歳児のショウが言います。「ぼく、ヨシノブ先生みたいに大工さんになる！」（もちろん5歳児担任のヨシノブ先生は大工さんではありません。）

普段、K 幼稚園での担任保育者とクラスの子どもの関係は、保育する者（保育者）と保育される者（子ども）の関係であるといえます。では、エピソード1-2にあるヨシノブ先生とショウの関係はどうでしょうか。大工仕事をしているヨシノブ先生はショウの憧れの存在であることが発言からわかります。ショウのように子どもたちは保育者の言動をよく見ています。保育者は保育をするために子どもたちをしっかりと見ますが、同時に子どもたちから見られています。つまり、保育者は「見られる存在」として子どもの育ちにおいて重要な環境の1つとなります。

エピソード1-1やエピソード1-2で見てきたように、人と人との関係とは先輩—後輩、保育する者—保育される者というように、同じ人と人との関係でも常に固定されたものではありません。状況に応じて揺れ動きながら変化する、これが人間関係の特徴の1つであるといえるでしょう。

第2節 子どもを取り巻く環境の変化

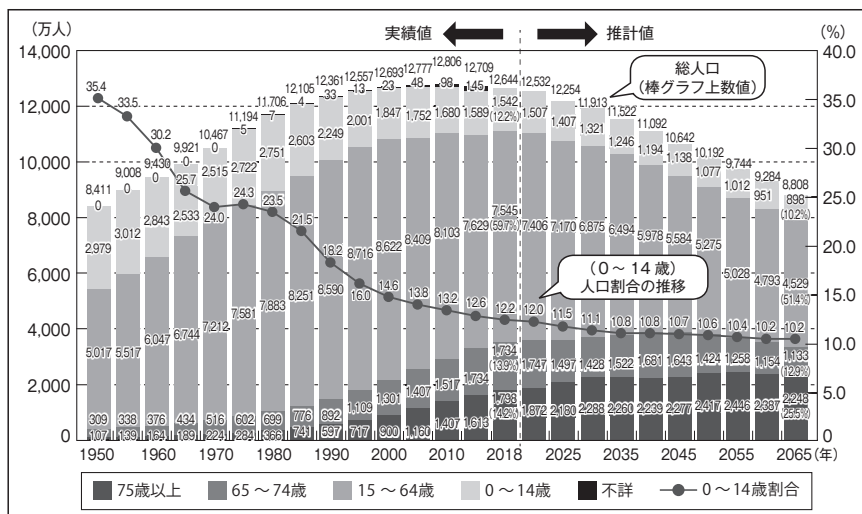
近年、私たちの生活している生活環境の変化は目覚ましく、この変化は子どもたちの育ちに大きな影響を与えています。本節では環境の変化の中でも人との関わりに関連する変化についてとりあげ、考えていきたいと思います。

(1) 人口構造の変化

日本の人口構造はこの数十年で大きく変化しました。図表1-1を見てみましょう。折れ線の値は年少（0～14歳）の人口割合の推移を示しています。1970年代に全人口に対する年少人口の割合が全体の4分の1程度に当たる24.0%であったのに対し、2020年には12.0%と予測されており半分になっていることがわかります。一方で65歳以上の割合は1970年に7%であったのに対し、2018年には28.1%となりかなり増加していることがわかります。このように50年ほどの間に日本の人口構造は大きく変化し、今後も同様の変化が続いていくことが予測されています。

人口構造の変化は子どもの生活にどのような影響をもたらしたのでしょうか。50年ほど前は学校から下校すると近所の空き地や路地、公園などに友達と集まって遊んでいました。現在はどうでしょうか。空き地の減少などから子どもたちが安全に遊べる場所が少なくなっているといわれています。さらに遊んでいる「子どもの声がうるさい」という理由などから、遊び時間や遊びの内容が制限されている公園も少なくありません。このように人口構造の変化によって、大人の生活環境が優先されるようになり、子どもの遊び環境は影響を受けているといえるでしょう。

続いて、子どもたちの友達づきあいについて考えてみたいと思います。杉森(2017)らは、1983年と2016年に小学生に対して友達づきあいについて調査をしています。その結果、放課後に友達と家に帰ってから一緒に遊んだり、宿題や勉強をしたりするかという質問に対して、「ほとんどない」と回答した割合が顕著に増えている^{※1)}としています。また、放課後の遊び相手の中に「年下の子」



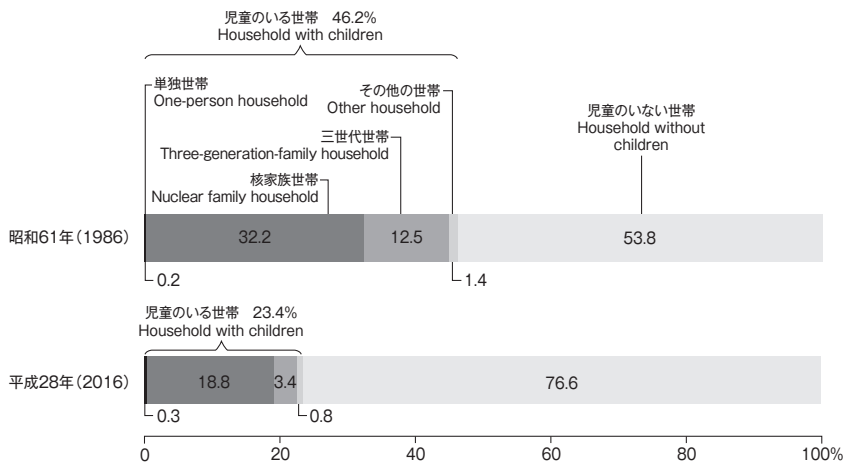
図表 1-1 我が国の総人口および人口構造の推移と見通し

出所：『少子化社会対策白書』，2 頁。

や「年上の子」が1人もいないのは、2016年の調査時に年下で5割強、年上で6割強となっており、1983年と比較し顕著に増えている^{※2)}としています。子どもたちの友達との遊びの変化は、塾や習い事に通うために遊ぶ時間が無くなったことの影響も大きいと思われます。しかしながら、人口に対して子どもの数が減少したことが要因の1つとなっていることが考えられます。

(2) 家族構成の変化

子どもたちの人間関係の基盤となる家族構成の変化について見てみましょう。



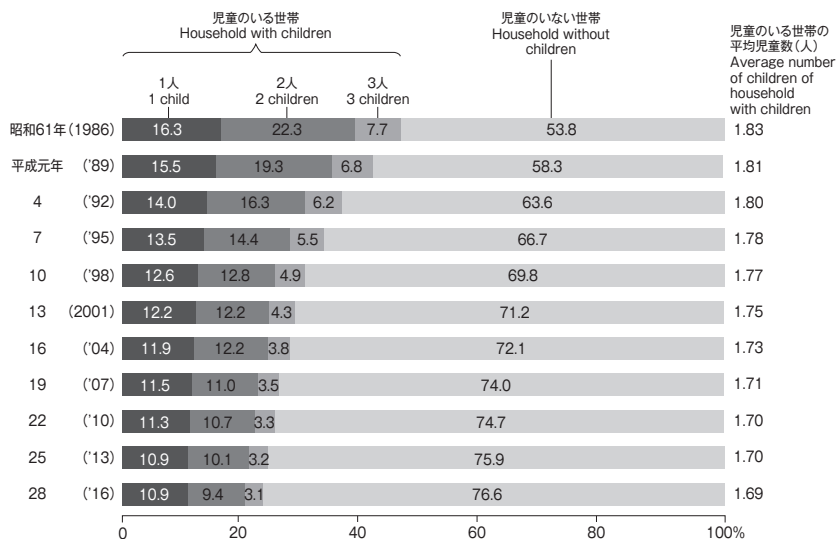
図表 1-2 児童の有無別にみた世帯構造別世帯数の構成割合の年次比較（昭和 61 年，平成 28 年）

出所：『グラフでみる世帯の状況—国民生活基礎調査（平成 28 年）の結果から—』，p.14。

図表 1-2 は児童（18 歳未満の子ども）のいる世帯の世帯構造の変化を示しています。1996 年に半数近くあった児童のいる世帯数は 2016 年には 4 分の 1 以下に減少していることがわかります。また三世帯世帯つまり親と児童および親の親（児童からすると祖父母にあたる）が同居する世帯が全体の 12.5% から 3.4% へとその割合が 3 分の 1 程度に減少しています。

続いて児童のいる家庭の子どもの数について図表 1-3 から考えてみたいと思います。1986 年には児童のいる世帯の平均児童数は 1.83 人となっており、児童 2 人の世帯の割合が一番高くなっていました。2001 年になると児童 1 人の世帯と児童 2 人の世帯の割合がほぼ同じとなり、2007 年以降には児童 1 人の世帯が一番高い割合となっています。

図表 1-2 や図表 1-3 からこの 30 年間で世帯構造が大きく変化したことが

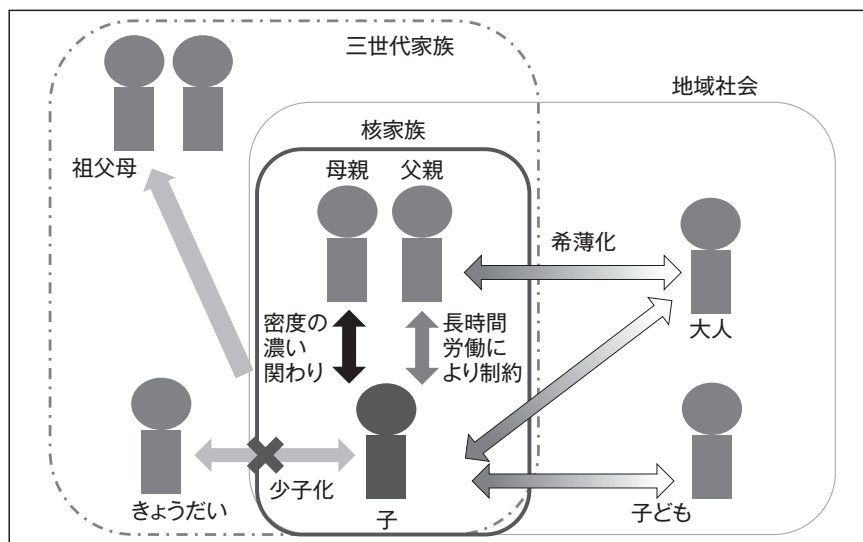


図表 1-3 児童の有無および児童数別にみた世帯数の構成割合・平均児童数の年次推移
出所：『グラフでみる世帯の状況—国民生活基礎調査（平成 28 年）の結果から—』, p.14。

わかります。児童のいる家庭自体が大幅に減少していますが、児童がいる家庭においても保護者と子ども 1 人という家庭が一番多くを占めています。これは家庭内において子どもが関わりを持つ人が保護者だけであることを示しています。また、男性の長時間労働が問題とされている日本において、6 歳未満の子を持つ男性が家事・育児に費やす時間は 2016 年で 1 日当たり 83 分とされています。近年、増加傾向にあるとのことですが、先進国において最低水準であるとされています。

（3）地域社会の変化

昔は隣近所のつきあいや地域における子ども会などがあり、地域の子どもの成長を地域の大人たちが見守る地域コミュニティがありました。こうした地域コミュニティにおいて、子どもたちは異年齢の子ども達と関わったり、親以外の大人と関わったりする機会を持つことができました。近年、特にサラリー



図表 1-4 子どもを取り巻く人間関係

マン家庭が多い都市部においては、大人たちが地域にいる時間が少ないため、近所づきあいが希薄化していることが報告されています。また都市部に多いマンションなどの集合住宅では、隣の部屋に住む住人を知らないこともあります。地域によって差はありますが、地域社会において子どもたちが多様な人々と関わる機会は以前より減少しているといえます。

人口構成や家族構成、地域社会の点から、現代の子どもを取り巻く人間関係の特徴を図式化してみたいと思います。図表1-4を見てみましょう。

図における矢印の色の濃淡は、関係の濃さを示しています。3世代家族の減少や、地域の人たちと関わりが減少したり希薄化したことにより、人との関わるの空間が家庭内へと限定的になっていることがわかります。そして、父親が育児に関われないことから、母親と子の関わりがとても濃密になっています。このような限定的な人間関係は、母親の過干渉など子どもの育ちにおいて問題となることが考えられます。また閉じられた関係における閉塞感により母親が育児不安になること、それが虐待へとつながっていく可能性があることなどが

ら、母親の子育ての観点からも問題視されています。

（４）機械化および情報化

日常生活の機械化や情報化によって人々の生活は大きく変化しました。ほうきで掃いたり、雑巾掛けをしていた掃除も、ボタン1つでロボットが行ってくれます。自動調理器は材料を入れてスタートボタンを押せば、おいしい料理を完成させます。このようにあらゆるものの機械化によって、人々の日常生活は省力化され便利になっています。しかし、乳幼児期に大切であるとされている直接体験や掃除や調理といった行為そのものを目にする機会は、機械化によってどんどん奪われているといつてよいでしょう。

近年の情報環境の発展は目覚ましいものがあります。それにより、他者への意思伝達の手段も以前と比較し大きく変化しました。かつては離れた場所の人に連絡を取りたい場合、手紙や電話といった手段を利用していました。現代では時間や場所を問わず瞬時に伝達が可能となるインターネット回線を利用した電子メールやソーシャルネットワークサービス（SNS）を利用する機会が増加しています。2016年に内閣府が15歳～29歳までの男女に調査を実施したところ、他者と関わる際のインターネットの活用について61.3%が率直に話ができるので便利、70.7%が情報発信・収集の手段として活用できるとする一方で、68.8%が自分や相手の気持ちが伝わりづらいと考えていることがわかりました。このように情報環境の発展により便利になった面もありますが、人間関係の基盤となる人と人が対面あるいは肉声にて自らの気持ちや考えのやりとりをする機会は減少しているといえるでしょう。

2015年の総務省情報通信政策所の調査によると、0歳児の10.5%、2歳児になると31.4%、4歳児になると41.4%が情報機器の端末（スマートフォン、タブレット型端末、ノートPC等）を利用している（保護者が見せたり使わせたりしている場合を含む）としています。この結果は私たちが想像している以上に情報機器が生活の中に取り込まれており、子どもたちはかなり早い時期からあたりのこととして情報機器に接する時代になってきていることを示しています。情報機器

には多くの可能性があり、それを活用すれば店員さんとのやりとりをすることなく買い物ができ、買った商品が自宅のポストまで届くといった便利な時代になりました。人との関わりも省力化される時代になっています。私たちはこうした時代背景を考慮し、保育の現場において子どもの育ちに何が重要なのかということを考えていかなければなりません。

第3節 保育施設における課題

(1) 友達との関わりの中で

人は出生時から様々な人と出会い、人と関わりながら社会生活を営んでいきます。近年、学校や職場などでうまく人間関係が築けず、不登校になったりひきこもりの状態になる若者の増加が社会の問題となっています。「人とどのように関わっていったらよいか」ということは、実際に人との関わりを体験することなしには学ぶことができません。しかし前節でみてきたように、現代の子どもは日常生活において多様な人と関わりを持つ機会が以前より減少しています。乳幼児期は人との関わりの育ちの基盤となるととても大切な時期となります。保育現場は、子どもたちが様々な人と関わりながら人との関わり方を学ぶ機会を保障することが重要となるでしょう。

エピソード 1-3! 一緒にうれしいね(2歳児)※3)

2歳児クラスでは遊戯室に行く前に2人で手をつなぎ、列になって移動をすることになっています。午後おやつを食べ終えた子どもから、保育者のところに集まり、順番に手をつないでいきます。アヤとハルマは生活のグループが異なるため、遊びの時間もほとんど関わりを持つことはありませんが、隣同士になったためアヤがハルマの手を握ります。ハルマが少しびっくりしたように握られた手を上にあげて振りほどきます。保育者が「ハルマくんどうしたの？ 遊戯室に行くときは手をつないで行くお約束だよね。」と言うと、ハルマは黙って前を向いています。アヤがもう一度、ハル

マの手を握ると、ハルマは少し嫌そうな顔をして、手をつないだまま前を向いています。保育者が「一緒にうれしいね！仲良しだね！」と言うと、アヤとハルマがお互いの顔を見て、笑い合います。アヤが「一緒だね」と笑顔で言うと、ハルマが「一緒！」とうれしそうに答えます。

遊戯室に行くとアヤとハルマが一緒にかけっこをしたり、大きなソフトブロックを使って遊びます。そして、遊戯室から保育室に帰る時には、アヤとハルマが笑顔で手をつなぎ、お互いに何度も「一緒！一緒！」と楽しそうです。その後、アヤとハルマは外遊びや保育室での遊びでも一緒に遊ぶ姿が見られるようになりました。また、「一緒に」という言葉が気に入ったようで、アヤとハルマが「一緒に！」と言いながら一緒に遊ぶ姿が見られるようになりました。

子どもたちは出生後しばらくの間、1日の大半の時間を家庭で保護者と過ごします。そして保育施設に入園すると保育者や友達をはじめとしたたくさんの他者に出会います。エピソード1－3からは、ハルマがアヤと出会ったときのとまどいを感じとることができます。アヤとハルマが保育者の「一緒にうれしいね！仲良しだね！」という一言によって、友達の存在に気づき、友達と関わることの楽しさを経験している様子がわかるでしょう。

このように保育者に見守られながら安心して園で生活できるようになると、子どもたちは友達との関係を徐々に広げていきます。友達との関わりの中では、楽しいことばかりではなく、意見の食い違いや自分の思い通りにいかないこともたくさん経験します。そしてエピソードにもあるように、他者との生活において守らなければいけないきまりやルールがあることに気付いていきます。保育施設における友達との関わりを通して、子どもたちは「人とどのように関わっていったらよいか」ということを学んでいくのです。

子どもたちの自立心を育て、人と関わる力を養うために、保育者は子どもの発達をしっかり理解し、その発達にあわせて保育を組み立てると同時に適切な援助をしていくことが大切です。具体的な援助の方法についてはこれからの章

を読み進めてください。

(2) 多様な人との関わりの中で

保育施設での生活において、子どもたちは担任の保育者やクラスメートだけではなく様々な人と出会います。そしてそれぞれの場面において人との関わりを経験します。

エピソード 1-4 お店屋さんごっこをします (5歳児)

5歳児のゾウ組は、水曜日にホールでお店屋さんごっこをすることになりました。売り物の商品を作り終えたので、案内のポスターを書き、担当を決めて年少のクラスにお知らせに行くことにしました。1歳児のリス組にお知らせに行くのは、ミサキとサクラとヨシキ。担任の先生のアドバイスを受け、ポスターではなく商品のおもちゃを持っていくことにしました。

3人はおもちゃを手に持ってリス組に向かいます。リス組の保育室に入ると、遊んでいる1歳児の子どもたちに向かって3人で声を合わせて「○月○日ホールでお店屋さんごっこをします。来てください。」とおもちゃを手に一気に言い切りました。リス組の子どもたちは遊びを中断し、突然現れた3人の5歳児の顔をじっと見つめています。

ミサキはリス組の子たちに通じていないことに気付き、保育室の奥にいる担任の保育者に声を掛けます。「田中せんせい、○月○日にホールでお店屋さんごっこやるから来てください。」田中先生は「わかった。リス組のみんなで行くね。」と答えます。

きょうだいや隣近所の子どもの数が少ない現在は、子どもが自分より年下や年上の子どものと関わる機会は極めて少ないといえます。保育施設においては、年齢の異なる子どもたちが同時に在籍していることから、生活のあらゆる場面で異年齢の子どもとの関わりが創出されます。エピソード1-4のミサキたちは年下のきょうだいがいません。1歳児への伝え方のヒントとして担任の先生

から商品のおもちゃを持っていくようにアドバイスを受けたが、ミサキたちの言葉は1歳児の子どもたちに届かなかったようです。エピソードにあるように試行錯誤しながら年下の子どもたちと関わる経験を通して、年齢の異なる人との関わりについて学んでいきます。

異年齢児と関わることは、年長児には自分より年少児に対する思いやりの気持ち、年少児には年長児に対する憧れの気持ちが育つ貴重な体験であるといえます。異年齢の子どもと関わる経験が少ない現代だからこそ、保育施設という特徴を生かし、クラスや年齢だけに縛られない保育を工夫していくことが重要になってくるでしょう。

【注】

- ※1) 杉森らの調査によれば1983年と2016年の調査において友達と遊ぶことがほとんどないと回答した男子は31.5%から43.9%に、女子は30.2%から45.4%に増加しています。
- ※2) 杉森らの調査によれば、1983年と2016年の調査において年下の遊び相手が「1人もいない」と回答した男子は37.6%から55.3%に、女子は34.2%から53.6%に増加しました。また年上の遊び相手が「1人もいない」と回答した男子は9.1%から62.3%に、女子は6.3%から66.9%に顕著に増加しています。
- ※3) エピソードは茨城大学教育学部附属幼稚園の小野貴之氏に提供いただきました。

・・・・・・・・・・引用・参考文献・・・・・・・・・・

- 小川博久『保育者養成論』萌文書林、2013年。
- 「少子化社会対策白書（令和元年版）」内閣府、2019年。
- 「グラフでみる世帯の状況—国民生活基礎調査（平成28年）の結果から—」厚生労働省政策統括官（統計・情報政策担当）、2018年。
- 杉森伸吉・曹 蓮 「33年前と今の子どもの友だちづきあい」『児童心理』No.1039、2017年。
- 「平成29年度版子供・若者白書」内閣府、2017年。
- 「未就学児等のICT利活用に係る保護者の意識に関する調査報告（概要版）」総務省情報通信政策研究所、2015年。

第 1 章 確認問題

1. 現代の乳幼児を取り巻く人間関係の特徴について簡単に文章でまとめましょう。
2. 1 の特徴から保育施設において大切にしたいことを考えてみましょう。